

ティギーウィンクルさん の話



ビアトリクス・ポター さく・え

たちばな こうじ やく



ニューランドにいるほんものの小さなルーシーへ



昔々、リトルタウンという農場に、ルーシーって名前の小さな女の子がいた。
とってもいい子だったよーただね、しょっちゅうハンカチをなくしちまうんだ！
ある日小さなルーシーが、泣きながら農場の庭にやってきたーおやおや、こんな
ふう泣いてるよ！
「あたい、ハンカチなくしちゃった！ ハンカチ三枚にエプロン一枚！ あんた知
ってる、子猫のタビー？」



子猫は白い足をなめ続けてた。

それでルーシーは、まだらのあるめんどりにきいた —

「サリー・ヘニーペニー、ハンカチ三枚見なかった？」

けれども、まだらのめんどりは、コッコッと鳴きながら納屋に駆け込んだ —

「あたくしはだしになるわ、はだし、はだしに！」



そこでルーシーは、小枝にとまっていたコマドリ坊やにきいてみた。

コマドリ坊やはきらきらする黒い瞳でルーシーを横目に見ると、牧場の柵の踏み越し段をこえて飛び去っていった。

ルーシーは段の上にのぼって、リトルタウンの背後にそびえる丘を見上げた。一丘は高く、なお高く、雲の中まで突っ込んでいて、まるでてっぺんなんかいないみたいだった！

そして大きな道がはいのぼる丘の斜面の草の上に、ルーシーは何か白いものが広がっているのを見た気がした。



ルーシーは丘を駆けあがった。ちっちゃな足が運べるかぎりの早さで。
急な坂道を走って—上へ上へ—とうとうリトルタウンははるか下に遠ざかった—
煙突に小石を投げ落とせるくらいに！



やがて丘の中腹に、こんこんとわき出る泉を見つけた。

誰かが水をくむために、石の上にブリキの缶を置いていた—けれども水はとっくにあふれ出していた。何しろその缶ときたら、ゆでたまご立てより小さかったんだから！

そして、濡れた小道の砂のうえに—とっても小さな誰かさんの足跡がついていた。

ルーシーはそれを追いかけていった。



小道は大きな岩壁のふもとで途切れていた。

丈の低い緑の草が生い茂るなかに、わらびの茎から切りだした物干し柱が立っていて、イグサで編んだひもが張り渡され、小さな洗濯ばさみが沢山置いてあったーでもハンカチはなかった！

けれども何か別の物があるー ドアだ！

丘の内側に通じていて、中で誰かが歌っているー

白百合みてえにまっさら、ホイ！

こまっけフリルのあいださ、ホイ！

すうべすべのほっかほかー 赤っ茶けたしみも

ここじゃひとつもめっかんね、ホイ！



ルーシーはノックした — 1回 — 2回、すると歌がやんだ。

おっかなびっくりの小さい声が返ってきた。

「どちらさんで？」

ルーシーはドアを開けた。

そしたら丘の内側に、何があったと思う？ — 清潔で使い勝手のよさそうな台所だったのさ、石敷きの床に木の梁で — まるっきり農場の台所そっくりの。ただ、天井はたいそう低くてルーシーの頭がさわりそうだったし、つぼやなべをはじめ、そこにある何もかもが小さかった。



あったかくてこんがりいい匂いがしていた。

そしてテーブルのところに、アイロンを手にした、ひどくずんぐりと背の低いひとが立って、不安げにルーシーを見つめていた。

柄物の部屋着をたくしあげ、しま模様のペチコートの上に大きなエプロンをつけたそのひとは、小さな黒い鼻をフンフンいわせ、目をしばしばさせていた。

そして、彼女の帽子の下には一ルーシーなら黄色い巻き毛があるところには一とげとげが生えてたんだ！



「あなた誰？」 とルーシーは言った。「あたいのハンカチ知ってる？」

その小さな人はひよいと会釈して—

「あいあい、はばかりさん。オラ、ティギーウィンクルさんちゅうだよ。あいな、はばかりさん。オラあ腕っこきの洗濯屋だべさ！」

そして衣類かごから何かを取り出し、毛布をかけたアイロン台の上に広げた。



「それなあに？」 ルーシーはきいた — 「あたいのハンカチじゃない？」
「いんえいえ、はばかりさん、こりゃコマドリ坊やのちっこい赤チヨッキだ！」
彼女はそれにアイロンをかけ、折りたたんで脇へ置いた。



それから、衣紋掛けから別の何かを取ったー

「それあたいのエプロンじゃない？」とルーシー。

「いんや、はばかりさん、こりゃミソサザイジェニーのダマスク織りのテーブルクロスだんべ。ここのスグリワインの染みさ見てけれ！ 洗うにえらく難儀しただよ！」とティギーウィンクルさんは言った。



ティギーウィンクルさんは鼻をフンフンいわせ、目をしばしばしながら、暖炉からもうひとつ別の熱いアイロンを持って来た。



「あたいのハンカチ一枚見つけた！」 ルーシーが叫んだー「それに、あたいのエプロン！」

ティギーウィングルさんはそれにアイロンをかけ、ひだをつけて、フリルを振り広げてくれた。

「わあ、すっごくきれい！」 ルーシーは声をあげた。



「ねーえ、この手ぶくろみたいに指がついてる、長くて黄色いのなあに？」

「あいな、そりゃサニー・ヘニーペニーのストッキングだべ。見てけれ、庭でひっかいてかかとをはきつぶしちまってるだよ！ あんひとあ、あっちゅうまにはだしになっちまうだべ！」と、ティギーウィンクルさん。



「あ、またハンカチーでもあたいのじゃない。この赤いのは？」

「あんれま、はばかりさん、そりゃラビットかあさんのもんで、えらくタマネギくさかっただよ！ 他のもんと分けて洗わにゃならんかったわ、このにおいは落ちねえだ」

「あたいの、もう一枚あった！」とルーシー。



「このおかしな小さくて白いのはなに？」

「子猫のタビーの手ぶくろだ。そいつにゃオラはアイロンかけるだけでええだ、あの娘ッコは洗うのは自分でするだよ」

「見つけたあたいの最後のハンカチ！」 ルーシーは言った。



「何を洗濯のりにつけてるの？」

「シジュウカラトムのちっこいシャツの胸当てだーおっそろしく几帳面なお人なんだべ！」とティギーウィンクルさん。

「んだば、アイロン掛けはこれでしめえだ。そっちの服さ干すだな」



「この柔らかくてふわふわした可愛いのは？」とルーシー。

「あいあい、そりゃスケルギール農場の子羊のもこもこコートだべさ」

「あのもこもこは脱げるの？」とルーシーはたずねた。

「あいな、はばかりさん。肩んとこのヒツジ印さ見てみれ。こっちはゲートガースの印つき、あっちの3つはリトルタウンからのだべ。あん子らはちゃあんと印さつけて洗濯に出すだよ！」とティギーウィンクルさんは言った。



彼女はいろんな種類やサイズの洗濯物を吊していった — ネズミたちの小さな茶色いコート、ベルベットのような黒いモグラの皮のチョッキ、リスのナトキンの尾のない赤い燕尾服、ピーターラビットのひどく縮んだ青い上着、そして、誰かの印が洗い落とされてしまったペチコート — とうとうかごは空になった！



それから、ティギーウィンクルさんはお茶を入れた — 自分のカップとルーシーのカップに。

二人は暖炉の前のベンチに座り、互いを横目で見やった。

カップを包んでいるティギーウィンクルさんの手は、それはそれは茶色く、石けんの泡でそれはそれはしわしわになっていた。

そして部屋着や帽子のそこらじゅうから、髪の毛の針が外に向かって突きだしていた。

だからルーシーは、あまり近くには座らないようにした。



お茶を飲み終わると、二人は衣類をひとまとめに布でくるんで縛った。
ルーシーのハンカチは、まっさらなエプロンのなかに畳み込まれ、銀の安全ピンで留められた。
それから、暖炉に泥炭をくべ、外に出て鍵を閉めると、鍵を戸口の敷居の下に隠した。



そうしてルーシーとティギーウィングルさんは、洗濯物の包みをかかえ、足早に丘を下りていった。

下っていく道々で、小さな動物たちがシダのあいだから顔を出した。

いのいちばんに出くわしたのは、ピーターラビットとベンジャミンバニー！



きれいになった洗濯物を渡された動物や鳥たちは、みんなみんな、ティギーさんに
いたく感謝していたよ。



そんなこんなで、丘のふもとの踏み越し段のところまで来た時には、荷物はルーシーの小さな包みしか残っていなかった。



ルーシーは包みを手に、踏み越し段をよじ登り、洗濯おばさんにお礼と「おやすみなさい」を言うために振り向いた。—なのに、けったいなことさ！ ティギーウィンクルさんは、ありがとうもお勘定も待っちゃいなかったんだ！
彼女は丘を、駆けに駆けて駆け上がった — しかも彼女のフリル付きの帽子はどこに行っちゃったんだらう？ 肩掛けは？ 部屋着は — それにペチコートは？



そのうええらく縮んじまってーおまけにえらく茶色くてーしかもとげとげだらけだった！

何とまあ！ ティギーウィンクルさんは、ただのハリネズミだったのさ。

（さて、ある人たちはこう言うんだ、ちっちゃなルーシーは踏み越し段の上で眠りこんでたんだってーけど、それじゃあの子はどうやって洗濯ずみのハンカチ三枚とエプロンを見つけたんだらう、銀の安全ピンつきでさ？

それともうひとつーこの私はね、キャットベルって丘の裏で、中に通じるドアを見たことがあるんだよーさらにもうひとつ言えば、この私はね、とっても親しい知り合いなのさ、愛すべきティギーウィンクル夫人とね！）

おしまい

ポター作品リスト

Beatrix Potter作品の日本における著作権は消滅し、パブリックドメインに帰しています。
翻訳の底本はFREDERICK WARNE出版の The original and authorized edition です。

1. The Tale of Peter Rabbit (1902) 【[ピーターラビットの話](#) : 2012.3】
2. The Tale of Squirrel Nutkin (1903) 【[リスのナトキンの話](#) : 2012.3】
3. The Tailor of Gloucester (1903) 【[グロスターの仕立屋](#) : 2012.4】
4. The Tale of Benjamin Bunny (1904) 【[ベンジャミンバニーの話](#) : 2012.3】
5. The Tale of Two Bad Mice (1904) 【[二匹のいたずらねずみの話](#) : 2012.12】
6. The Tale of Mrs. Tiggly-Winkle (1905) 【[ティギーウィンクルさんの話](#) : 2012.5】
7. The Tale of the Pie and the Patty-Pan (1905) 【パイと焼き型の話 : 執筆中】
8. The Tale of Mr. Jeremy Fisher (1906)
9. The Story of A Fierce Bad Rabbit (1906) 【[あらくれやくざうさぎ物語](#) : 2012.12】
10. The Story of Miss Moppet (1906) 【[モペット嬢物語](#) : 2012.12】
11. The Tale of Tom Kitten (1907) 【子ねこのトムの話 : 執筆中】
12. The Tale of Jemima Puddle-Duck (1908)
13. The Tale of Samuel Whiskers or, The Roly-Poly Pudding (1908)
【[サミュエル・ウィスカースの話](#) もしくは、[うずまきプディング](#) : 2013.4】
14. The Tale of the Flopsy Bunnies (1909) 【[フロプシーのちびっこたちの話](#) : 2012.4】
15. The Tale of Ginger and Pickles (1909) 【[ジンジャーとピクルズの話](#) : 2013.1】
16. The Tale of Mrs. Tittlemouse (1910)
17. The Tale of Timmy Tiptoes (1911)
18. The Tale of Mr. Tod (1912) 【[ミスタートッドの話](#) : 2012.11】
19. The Tale of Pigling Bland (1913) 【[ピグリブランドの話](#) : 2013.12】 **NEW**
20. Appley Daply's Nursery Rhymes (1917) 【[アプリー・ダプリーの童謡](#) : 2012.4】
21. The Tale of Johnny Town-Mouse (1918)
22. Cecily Parsley's Nursery Rhymes (1922) 【[セシリ・パセリの童謡](#) : 2012.4】
23. The Tale of Little Pig Robinson (1930) 【[こぶたのロビンソンの話](#) : 執筆中】

原文参照

[Project Gutenberg : Books by Potter, Beatrix](#)

[Arthur's Classic Novels / Beatrix Potter](#)

ティギーウィンクルさんの話

<http://p.booklog.jp/book/50340>

作者：ピアトリクス・ポター

訳者：橘 柑子

作者プロフィール：<http://ja.wikipedia.org/wiki/ピアトリクス・ポター>

訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tokijikudou/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/50340>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/50340>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.